

否定応答表現の「いえ」「いいえ」「いや」について

富樫純一(筑波大学大学院)

jtogashi@lingua.tsukuba.ac.jp

0. 問題の所在/先行研究

応答は肯定応答と否定応答とに大別される。肯定応答には「はい」「うん」等の形式が用いられるのに対して、否定応答には「いえ」「いいえ」「いや」等の形式が用いられる。

(1) A このケーブルをつなぐんですか?

B1 いえ。

B2 いいえ。

B3 いや。

(1) B1~B3はいずれも否定応答として解釈される。「このケーブルをつなぐのかどうか」という疑問に対して「このケーブルはつながない」という意味を示す。では、ここで挙げた「いえ」「いいえ」「いや」の三つの形式には何らかの違いがあるのだろうか。

否定応答表現に関しては、いくつかの先行研究が挙げられるが、形式間の働き、解釈の異なりについて詳細に論じているものは少ない。

(a) 土屋(1997):「いいえ系感動詞」(「いいえ」「いえ」「いや」)

「いいえ」「いえ」: 対他的使用のみ / 「いや」: 独り言でも使用可  
何らかのコメントが後続する

(b) 森山(1989a):「反対表明類」(「いえ」「いいえ」「いやいや」「違う」)

「不同意類」(「いやだ」「ことわる」)

「不可能類」(「できない」)

反対的な反応/否認の形式

(c) 奥津(1989): 応答表現に先行する発話を分類して検討

否定的な応答の性格((2)(3))

(2) 「...フォーマルな場面でもし要求を拒否するとすれば、直接に「いいえ」系を使わずに、もっと間接的な否定的応答をするであろう」(奥津(1989), pp.10-11)

(3) 「...呼びかけの性質からして...呼ばれたら返事をするのが正しいマナーであり、否定的な応答とは「いいえ」系で応答するのではなく、全く応答しないという、呼びかけの無視であろう」(奥津(1989), p.11)

(d) 田窪・金水(1997): 応答詞「いいえ」「いえ」「いいえ」

相手の発話に対する否定的応答

否定的応答は「承認の機能+否定的な評価の先触れ」

これらの先行研究について言えるのは、否定応答表現としての分析は試みられているものの、個々の形式の差異、何故この形式がこの用法に用いられるのか、といった点にはほとんど言及されていないということである\*1。

特に「いえ」と「いいえ」は同一の形式として捉えられがちで、この二つの形式の異なりは今まで全くと言っていいほど注目されていなかったといえる。

(4)(Bがそっと部屋を出て行こうとするのを見て)

A あれ、どこ行くの？

B1 いえ、ちょっと急な用事が入って……。

B2 ??いいえ、ちょっと急な用事が入って……。

(4)のような状況では、「いいえ」で応答すると非常に不自然である。となると、「いえ」と「いいえ」には何らかの差が存在すると考えることができる。

本発表では、否定応答表現「いえ」「いいえ」「いや」の三形式の詳細な観察を行い、各形式間の異なりを明らかにしていく。

## 1. 考察対象

本節では具体的な考察対象についての設定を行う。「いえ」「いいえ」「いや」にどのような特徴があるのかを見ることで、それぞれの形式を明確に規定しておく\*2。

まず、「いえ」と「いいえ」の異なりについて見てみる。「いいえ」は「いえ」のヴァリエーションとしては位置付けず、異なる機能を持つ別の形式として扱う。「いいえ」と「いえ」は否定応答としての振る舞いが異なるからである。

(5) A　　なんで、そんな話するの？

B1　　いえね、実を言うと……。

B2 ??いいえね、実を言うと……。

(5)に見るような終助詞「ね」の後接の可否は、「いえ」と「いいえ」が異なる形式であることの証左となるだろう。したがって、「いいえ」を単に「いえ」が長音化したヴァリエーション

\*1 肯定応答表現の研究では、「はい」「うん」「ええ」「そう」等の形式間の機能的な差異について詳細な分析がある(北川(1977)、日向(1980)、定延(2002)、富樫(2002c)等)。これと比較しても、否定応答表現に関しては分析が進んでいないことが見てとれよう。

\*2 なお、否定応答表現には、非上昇調のイントネーションの場合と上昇調のイントネーションの場合がある。

(a) A　　次の電車に乗るんですか？

B　　いえ、違います。(非上昇調) / ?いえ? 違います。(上昇調)

これらはニュアンスが異なると解釈される。上昇調は否定の意味合いに加えて、相手への問い返しのニュアンスが含まれていると考えられる。本発表では非上昇調のイントネーションの形式を主として取り上げる。

ンであるとは位置付けない。ここでは「いいえ」と「いえ」を区別する判断基準として終助詞「ね」が後接するかどうかを見る\*3。

「いや」について。「いえ」「いいえ」とは異なり、「いや」の長音化形「いやー」は「いや」のヴァリエーションとして位置付けられる。これは終助詞「ね」がどちらの形式にも後接可能だからである\*4。

- (6) A で、どうなったの?  
B いやね、あんまり大したことはなかったよ。
- (7) A で、どうなったの?  
B いやーねー、あんまり大したことはなかったんだよねー。

## 2. 現象の観察

本節では否定応答表現の各形式の観察を行う\*5。

### 2.1. 概観

まずは「いえ」「いいえ」「いや」の三形式を概観的に観察してみる。直観的には、これらの形式は「丁寧/非丁寧」という基準によって使い分けられていると捉えることができる\*6。

- (8) A このケーブルをつなぐんですか?  
B1 いえ、違います。  
B2 いいえ、違います。  
B3(?)いや、違います。

---

\*3 ただし、「いえ」と「いいえ」の境界線を明確にすることは困難をきわめる作業である。長音であるかどうかの区別がかなりきわどく、判断が恣意的になるからである。例えば、

- (a) A ありがとうございます。  
B いやー、どういたしまして。

この「いやー」は「いやー」が低く「えー」が高いイントネーションになる。このような形式を「いえ」のヴァリエーションとするのか、「いいえ」のヴァリエーションとするのかは判断に迷うところである。

\*4 「いやだ」のくだけた表現と解釈される場合もある。

- (a) A お金貸して。  
B いや。

この場合は、急激に下降するイントネーションになる。応答表現の「いや」はこのような急激な下降をしないため、本発表では(a)のような「いや(だ)」は分析の対象とはしない。

\*5 用例における内省判断は一部を除き、発表者および大学院生10名へのアンケート調査に基づいて、その平均的な結果を示してある。多少のずれはあるものの、おおむね平均的な内省を示していると思われる。

許容度の表示は、「無印>(?)>?>??>\*」の順である。「#」は、表現自体は許容されるが、示された文脈・状況とはそぐわない表現であることを表す。

\*6 丁寧さを基準とすると、「ううん」という否定応答表現形式も考察対象として挙げなければならないのであるが、本発表では扱わないこととする。

(9) A このケーブルをつなぐんですか？

B1 ??いえ、違う。

B2 ??いいえ、違う。

B3 いや、違う。

話し手BがAに対して「丁寧に話すかどうか」により、各形式の許容度が変わってくる。話し手Bが丁寧に発話する(8)のような状況では「いや」が用いられにくく、丁寧さを伴わない(9)のような状況では「いえ」「いいえ」が用いられにくい。これは、(8)(9)のような yes-no 疑問に対する応答だけに限ったことではない。

(10) A ねえ、遊びに行かない？

B1 いえ、いいです。

B2 いいえ、いいです。

B3 ?いや、いいです。

(11) A ねえ、遊びに行かない？

B1 ??いえ、いいよ。

B2 ??いいえ、いいよ。

B3 いや、いいよ。

(10)(11)のように勧誘に対する断りで用いる場合にも「丁寧／非丁寧」という基準で使い分けがなされていると見ることができる。

とはいえ、「丁寧／非丁寧」の基準が常に優先的に働くわけではない。例えば、

(12) A ありがとうございます。

B いえ / いいえ / いや、どういたしまして。

このBの受け答えはいずれも許容度が非常に高い。丁寧に話そうとするために、ある形式が用いられにくくなる、ということは考えにくい。また、

(13)(市役所までの道を尋ねられて)

A 市役所はですね、えーと、そこを左折して二つ目の、

?いえ、

\*いいえ、

いや、

三つ目の信号を右折してしばらく行くと、左手のほうにあります。

(13)はかなり独り言に近い発話であるが、この場合「いや」だけが高い許容度を示し、他の形式は許容度が下がる(cf. 土屋(1997))。したがって単純に丁寧さという観点からだけでは、

三つの形式の使い分けを分析することはできないといえる。次節以降では、各形式同士の比較を行い、振る舞いの違いを確認していく。

## 2.2. 「いえ」と「いや」

上で見たように、「いえ」と「いや」の使い分けの一側面として丁寧さの有無がある。

(14)(友達同士で電車に乗り込んで)

A あれ? この電車って × 駅に止まるよねえ。

B1 ??いえ、止まんないよ。

B2 いや、止まんないよ。

(15)(上司と部下が電車に乗り込んで(上司 = A、部下 = B))

A おい、この電車、 × 駅に止まるよな。

B1 いえ、止まりませんよ。

B2(?)いや、止まりませんよ。

(16)(上司 = A、部下 = B)

A 例の書類、誰が持っているんだ?

B1 いえ、存じ上げませんが。

B2 #いや、存じ上げませんが。

丁寧さを必要としない状況で「いえ」を用いると非常に不自然になる((14))。逆に、丁寧さを必要とする状況では「いや」のほうが許容度が下がる((15))。もし許容できたとしても、上司Aに対して威圧的な態度を持って発話しているという解釈が生じる。(16)のようなかなり謙った文体・態度での発話と「いや」はそぐわず、上司に対して威圧的な態度であるとの解釈がなされる。これらを見る限りは、(聞き手に対しては)「いえ」が「より丁寧」であり、「いや」が「非丁寧(ぞんざい、威圧的)」であると位置付けられることが分かる。

では「いえ」「いや」の差異は丁寧さの異なりにすべて還元できるのであろうか。

(17)(重要な打ち合わせの最中に突然Aが)

A お昼は何食べようか。

B1 ??いえ、今は関係ないでしょ、その話は。

B2 いや、今は関係ないでしょ、その話は。

(18)(A = 親戚のおじさん、B = 高校生)

A 大学合格したんだって? おめでとう!

B1 ?いえ、まあ、おかげさまで、無事に。

B2 いや、まあ、おかげさまで、無事に。

(17)(18)のように一概に丁寧さの差に起因するものではないと思われる現象も確認できる。上の例はいずれも、Bにとっては丁寧さを必要とする場面である。にもかかわらず、「より丁寧」

なはずの「いえ」は(「いや」と比較して相対的に)許容度が下がる。

(17)は「Aが重要な打ち合わせの最中に関係のない話をしてきた」行為に対する否定であるが、丁寧さの有無にかかわらず、「いえ」を用いることは難しい。それに対して「いや」でその行為を否定することはまったく自然である。

また、(18)は「賞賛を受けたことに対する照れ」の態度を表出する効果を示す。ここでも聞き手である「親戚のおじさん」に対しては丁寧であることが求められるが、「いえ」は若干不自然となる(相対的に「いや」のほうが許容度が高い)<sup>\*7</sup>。

「いえ」と「いや」の差は丁寧さだけではないといえる。となると、「いえ」と「いや」の異なりは何に起因するのか。

(19)(異端審問風の場面)

A 太陽は地球の周りを回っています。

B1 いえ、地球が太陽の周りを回っているのです。

B2 いや、地球が太陽の周りを回っているのです。

(19)は「太陽が地球の周りを回っている」という情報そのもの(発話内容)を否定する応答である。この場合「いえ」「いや」共に許容度が高い<sup>\*8</sup>。(19)と(17)(18)との違いは、情報そのものへの応答か、「情報の提示行為」への応答かという違いに還元できるのではないだろうか。つまり、情報を提示する行為に対しての否定には、「いえ」が用いられにくいのである。

(20)(授業の最初で(A = 先生、B = 生徒))

A では、出席を取ります。相沢さん。

B1 ?いえ、あの一、先生のクラスは隣ですよ。

B2 いや、あの一、先生のクラスは隣ですよ。

(20)のような、間違っただけの行為に対する否定でも「いえ」の許容度が下がる。(20)は「先生が間違っただけのクラスに入ってきて出席を取り始めた」場面である。それをクラスの誰かが指摘する際に、「いえ」を用いることはできない。

行為に対する否定は、発話内容までは否定しない(関知しない)。これは、

(21)(重要な打ち合わせの最中に突然Aが)

A お昼は何食べようか。

B \*違う、今は関係ないでしょ、その話は。

\*7 (18)は結果として「照れ」の態度を出しているだけであって、本質的に何かを否定しているとは言い難い。

否定とは直接関わらず、態度の表出を狙った発話である。このような効果の側面に関しては3節で述べる。

\*8 もちろん、先に触れたとおり、「いや」のほうには威圧的な態度が認められる。それでも「いや」の許容度が低くならないのは、文脈状況によると考えられる。

情報そのものの否定に用いられる「違う」がこの場面では用いることができないことから分かる。この場合は、情報そのものではなく、情報の提示行為に関わる否定となり、そこに「いえ」と「いや」の差異を指摘することができる。

(17)(18)も(20)も情報そのものを否定しているわけではない。いずれも情報を提示する行為、そしてそこからつながる情報の関連性を否定しているのである。(17)では、当該場面にそぐわない発話をしたことを否定して関連性がないことを示している。(20)も、「出席を取る行為」を否定することで、「出席を取る行為」と「出席を取る場所」との関連性のなさ(間違っていること)を示す。

したがって、「いや」のほうが否定応答に関しては使用範囲が広いことがいえるだろう。「いや」が用いられない状況はそう多くはなく、(多少ニュアンスの違いはあるものの)丁寧さの有無に関係なく用いることができる。「いや」に認められる威圧的とも取れる強い否定のニュアンスは、「いや」が情報のあらゆる側面を否定することができるという機能的なものから導出されるものといえよう。そして、「いえ」はその使用可能範囲が「いや」よりも狭く、情報の提示行為に対しては「いや」ほどの許容度の高さが無い。

(a) 「いや」: 情報そのもの、および情報提示行為に対して否定することができる

(b) 「いえ」: 情報そのものに対して否定することができる

(情報提示行為に対しては状況によって可否が変わる)

ただし、どちらにも終助詞「ね」が後接できることを踏まえると、「いえ」「いや」の機能は(本質的には)かなり似通っているのではないかとの予測が成り立つ。少なくとも、「ね」が後接できない「いいえ」とは機能的な差異があり、それらの差異よりも「いえ」と「いや」の差が接近していると考えられることができる。

### 2.3. 「いえ」と「いいえ」

ここでは「いえ」と「いいえ」を比較してみる。「いえ」「いいえ」はおおむね同じ場面・状況で発話ができ、言い換えが可能である。

(22)(異端審問風の場面)

A 太陽は地球の周りを回っています。

B1 いえ、地球が太陽の周りを回っているのです。

B2 いいえ、地球が太陽の周りを回っているのです。

(22) B1、B2のどちらも「太陽が地球の周りを回っている」というAの提示した情報そのものを否定するために用いられている。土屋(1997)でも指摘されているとおり、「いえ」「いいえ」はその発話の後に何らかのコメント(提示された情報を否定する内容、根拠)が付加されやすく、「いえ」「いいえ」単独の発話では若干の不足感を感じる。

(23) A 太陽は地球の周りを回っています。

B1 ?いえ。

B2(?)いいえ。

話し手が何らかの否定の根拠を持っている、そしてそれを明示したほうが用いやすいことが指摘できる。

また、1節でも述べたとおり、「いえ」と「いいえ」はヴァリエーションの関係にあるのではなく、異なる別の形式である。

(24) A なんて、そんな話するの？

B1 いえね、実を言うと……。

B2 ??いいえね、実を言うと……。 (= (5))

終助詞「ね」の後接の可否の違いから、「いえ」と「いいえ」は機能の異なる別の形式と捉えられる。これは、以下の「いえ」「いいえ」の振る舞いの異なりを見ても明らかである。

(25) (体調が悪そうなBを見て)

A どうしたの？ 顔色悪いよ。

B1 いえ、何でもありません。

B2 ??いいえ、何でもありません。

(26) (会議で)

A 売り上げを伸ばすにはこの方法しかないんです。

B1 いえ、おっしゃることも分かるんですが、やはりその方法は……。

B2 ??いいえ、おっしゃることも分かるんですが、やはりその方法は……。

(27) (Bがそっと部屋を出て行こうとするのを見て)

A あれ、どこ行くの？

B1 いえ、ちょっと急な用事が入って……。

B2 ??いいえ、ちょっと急な用事が入って……。

(25)では「いえ」よりも「いいえ」の許容度が下がる。(25)で話し手Bが否定しているのは、Aが提示した「顔色が悪い」という情報そのものではない<sup>\*9</sup>。「顔色が悪いので心配だ」と声を掛けたAの行為を否定しているのである。(26)(27)も同様に差が見てとれる。「いえ」は問題なく発話可能であるが、「いいえ」はかなり不自然になる。

これらの例はいずれも情報そのものを否定しているわけではなく、情報の提示行為に関わ

\*9 もちろん、「顔色が悪いので心配して声を掛けた」という行為に「顔色が悪い」という情報が含まれている(自然な類推が可能である)ので、厳密な意味で情報そのものを否定していないわけではない。



る否定応答である。相対的な判断とはいえ、「いいえ」がのきなみ許容度が低くなるということとは、情報提示行為に対して「いいえ」で否定することができないということである。つまり、一見、類似した形式ではあるが、「いえ」と「いいえ」は否定応答として使用できる状況にずれが認められるのである。

「いいえ」は情報そのものを否定する場合にのみ用いることができる。「いえ」は情報そのものを否定することもできるが、情報提示行為に対しての否定にも用いることができるため、その使用範囲は「いいえ」より広いといえる。したがって、前節での観察も踏まえると、

- (a) 「いいえ」: 情報そのものに対して否定することができる。  
(情報提示行為に対してはどのような状況でも用いることができない)
- (b) 否定応答表現形式の使用範囲: 「いや」 > 「いえ」 > 「いいえ」

このような位置付けができるといえる。使用範囲の異なりを生み出しているのは、情報へのアプローチの仕方の違い(「情報そのもの」しか扱えないか「情報提示行為」も扱えるか)によるものであろう。

その意味では、情報そのものを否定するために「いえ」を用いると、情報そのものだけではなく、「情報を聞く」行為のほうも否定しているようなニュアンスが生じるのかもしれない。「いいえ」にはそのようなニュアンスは生じにくい((28))。

- (28) A 1たす1は2ですか?  
B1 いえ、1たす1は3です。  
B2 いいえ、1たす1は3です。
- (29) A ねえ、これ食べてもいい?  
B1 いえ、だめです。  
B2 ??いいえ、だめです。  
B3 いいえ。

また、(29) B2の許容度が下がるのは、情報そのものの否定を示す表現が二つ(「いいえ」と「だめだ」)重なっているためであるといえる。強制的な意図が読み込めない限りは、このような機能的重なりは許容しにくいのであろう。これは(29) B3の単独発話が相対的に許容度が高くなることから裏付けられる。

## 2.5. まとめ

2節では三つの否定応答表現形式「いえ」「いいえ」「いや」の現象を見てきた。現象の観察により明らかになったのは以下の点である。

- (a) 「いえ」と「いいえ」は機能が異なる別の形式として捉えられる
- (b) 「いや」はどのような状況かによる発話の制限を受けない

(c) 否定応答表現形式の使用範囲：「いや」 > 「いえ」 > 「いいえ」

そして、「いいえ」は情報そのものの否定にのみ用いられ、「いえ」「いや」は情報の提示行為も含んだ広い意味での獲得情報の否定に用いられる。また、「いえ」と「いや」では、「いや」のほうが行為の否定に関しては許容範囲が広い。

さらに、これらの使い分けと丁寧さが相関をなしているのは、否定可能な範囲の違いから導き出すことができる。「いや」が丁寧な発話とそぐわないのは、「いや」の持つ本質「情報のあらゆる側面を否定できること」が、相手を思いやる態度、つまりは否定的な物言いをしない態度とぶつかってしまうからであろう。「いえ」「いいえ」がそれに比して丁寧であるのも同様の理由である。

### 3. 否定応答ではない用法について

2節では、否定応答表現形式の本質とも言える情報の否定を示す現象を観察してきた。本節では派生的と考えられる用法を見ていく。

#### 3.1. 観察と解釈

否定応答と解釈されない用法には以下のようなものがある。

(30) (皆が待っている会議室に入ってきて)

いやー、どうもどうも。遅くなりました。

(31) A あら、Bさん。どうしたの？

B いえね、ちょっと聞いて下さいよ。お隣の奥様ったらね……。

(32) (会議で)

A 売り上げを伸ばすにはこの方法しか……。

B いやー、そうなんですよ。まさにその方法しかないんですよ。

これらは、何らかの情報を否定するものではない。特に(30)は談話冒頭での発話であり、情報そのものの否定はおろか、何らかの情報提示行為に対する応答ですらない用法である。

いずれの例も、何らかの情報を否定したという解釈を相手に期待しているわけではなく、会話の間を取る、相手との心理的な距離を縮める、場の状況を和らげるといった効果の側面のほうが強く読み込められると思われる。

しかも特徴的なのは、否定応答表現の三つの形式の内、「いや」と「いえ」にのみ、このような用法が確認でき、「いいえ」にはないという点である。

(33) \*いいえ、どうもどうも。遅くなりました。

(30) ~ (32)のような例は情報の否定ではなく、表現形式の発話による何らかの効果発現を

意図的に狙ったものであると捉えられる。次の例も同様である。

(34)(贈り物を渡されようとしたのを制止して)

A1 いえいえいえ、そんな立派なものは受け取れません。

A2 いやいやいや、そんな立派なものは受け取れません。

(34)はどちらも否定の解釈もあるが、効果の側面のほうがより強く認められるだろう。(34)は「相手が渡そうとした立派なもの」を否定しているのではなく、「立派なものを受け取る自分」を否定的に捉えているのである。さらに繰り返しの形を用いることで「自分への否定的な態度」という効果発現をさらに助長しているといえる<sup>\*10</sup>。

### 3.2. 派生の道筋

では、このような否定応答ではない用法(非否定用法)をどう説明したらよいのだろうか。田窪・金水(1997)ではこのような用法を「あいまいな否定」と呼んでいる。

(35) 「例えば、相手の発話に自分に対する賞賛が含まれている場合、肯定すると自己賞賛にとられるし、はっきり否定すると相手の評価能力を軽んずることになる。このような場合、しばしば「いや」「いやあ」「いやいや」等の応答が用いられる。これは、「あいまいな否定」と言えるであろう」 (田窪・金水(1997), p.266)

奥津(1989)が「儀礼的否定」と名付けた用法も、効果の発現を狙ったものとして位置付けられるだろう。

(36) 「……互いの位置を水平化し、対等で友好的な関係を保とうとする。論理的には相手の発話内容を否定するのだが、実践的には肯定的な効果をもつ。もし「はい」系で応答すれば、相手との差別的関係をそのまま維持することになり、かえって否定的な効果をもつことになる」 (奥津(1989), p.13)

つまり、否定応答表現を用いることで、「自分に対してそこまでしてもら必要はない」といった、自分を賞賛していないという態度を持っていることを聞き手に解釈させるのである。非否定用法は自己の行為を否定的に捉えることで、結果として、相手との間に生じる可能性

\*10 興味深いことに、繰り返し形に関しては、イントネーションパターンが二つに分かれる。後ろの要素がより下降していくイントネーションパターン1と、後ろの要素がより上昇していくイントネーションパターン2である。どちらのパターンで発話するかによって、そこから解釈されるニュアンスが異なってくる(定延(2000)、富樫(2002c))。

「いえ」と「いや」について見ると、「いえいえ…」はパターン1のみが可能なのに対し、「いやいや…」は両パターンが可能である。これが本質的機能とどう関わってくるのか、詳細な検討は今後の課題である。

のある軋轢を回避する効果を示すのである。

富樫(2002b)の言うところの、解釈による効果発現である。

- (37) 「そこにあるのは、聞き手に対して解釈を要求する行動と考える。情報処理の存在を聞き手に暗に解釈させることで、コミュニケーション上での効果を得る結果となるのである」 (富樫(2002b), p.108)

本質といえる情報の否定からの派生的な解釈なのである。このことは次の例によっても明らかになると考えられる。

- (38) いやー、どうも、遅れました。  
(39) ??いえー、どうも、遅れました。  
(40) \*いいえー、どうも、遅れました。

turn 冒頭での発話には「いや」しか用いられない。2節で分析した否定用法における使用範囲と非否定用法の使用範囲は並行的であることが分かる。この差は結局、行為の否定ができるかできないかというところに行き着くのである。

また、このような和らげの効果が(解釈として)発現しさえすればよい場合もある。

(41)(会議で)

- A 売り上げを伸ばすにはこの方法しか……。  
B いやー、そうなんです。まさにその方法しかないんですよ。 (= (32))

この場合、もはや情報の否定という側面はなく、ただ、相手との距離を広げないために用いているのである<sup>\*11</sup>。これらの非否定用法は本質的機能からの語用論的な派生と捉えられ、まとめると以下のようなになるだろう。

- (a) 否定の方向性を自分の行為に向けることで、相手との軋轢、心理的距離の開きを回避する効果を示す  
(b) 否定するような情報がない場合にも、和らげの効果を表出させるためだけにもちいることができる

---

\*11 おそらく、Saft(1998)が「いや」の用法の一つとして挙げている“turn-grabber”(turnの奪い取り)も、「儀礼的否定」に近いのではないか。(32)の例が、いわゆる“turn-grabber”であるが、これは「はい」系で受けても問題がない。にもかかわらず、「いや」が用いられるのは、まさに軋轢を和らげる効果が「いや」にはあるからだろう。

#### 4. おわりに

「いえ」「いいえ」「いや」の三形式のより厳密な機能記述を進めていくためには、「情報を否定する」ということはどういうことか、さらには「否定」とは何か、といった本質的な問題に言及していく必要があると思われる。

また、さまざまな他の類似の形式(「うん」「だめ」「違う」等)との関係、あるいは肯定応答表現との関係も視野に入れなければならないだろう。

#### 参考文献

- 日向茂男(1980)「談話における「はい」と「ええ」の機能」『国立国語研究所報告65 研究報告集2』, pp.215-229, 秀英出版.
- 北川千里(1977)「「はい」と「ええ」」『日本語教育』33, pp.65-72, 日本語教育学会.
- 森山卓郎(1989a)「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1, pp.63-88, 大阪大学文学部日本学科(言語系).
- 森山卓郎(1989b)「コミュニケーションにおける聞き手情報 聞き手情報配慮非配慮の理論」, 仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』, pp.95-120, くろしお出版.
- 仁田義雄(1997)「未展開文をめぐる」, 川端善明・仁田義雄(編)『日本語文法 体系と方法』, pp.1-24, ひつじ書房.
- 奥津敬一郎(1989)「応答詞「はい」と「いいえ」の機能」『日本語学』Vol.8, No.8, pp.4-14, 明治書院.
- 定延利之(2000)「韻律パタンが発話音調に反映されるかどうかは何かが決めるか? : 準備的考察」CREST 意味構造グループ研究報告.  
(<http://ccs.cla.kobe-u.ac.jp/Gengo/ja/link/CREST/jpn/substance/sadanobu/index.htm>)
- 定延利之(2002)「「うん」と「そう」に意味はあるか」, 定延利之(編)『「うん」と「そう」の言語学』, pp.75-112, ひつじ書房.
- 定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構 心的操作標識「ええと」「あー」」『言語研究』108, pp.74-93, 日本言語学会.
- Saft, Scott(1998) Some Uses and Meanings of Utterance: Initial *iya* in Japanese Discourse. In Noriko Akatsuka, Hajime Hoji, Shoichi Iwasaki, Sung-Ock Sohn and Susan Strauss (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, Vol.7. pp.121-137. Stanford:CSLI.
- Schiffrin, Deborah(1987) *Discourse Markers*. Cambridge:Cambridge University Press.
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」, 音声文法研究会(編)『文法と音声』, pp.257-279, くろしお出版.
- 富樫純一(2001)「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6, pp.19-41, 筑波大学文芸・言語研究科.
- 富樫純一(2002a)「あいづち表現形式に見る心内の情報処理操作について」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書 平成13年度V』, pp.27-42, 筑波大学.
- 富樫純一(2002b)「談話標識「ふーん」の機能」『日本語文法』Vol.2, No.2, pp.95-111, 日本語文法学会.
- 富樫純一(2002c)「「はい」と「うん」の関係をめぐる」, 定延利之(編)『「うん」と「そう」の言語学』, pp.127-157, ひつじ書房.
- 土屋菜穂子(1997)「感動詞の分類 対話コーパスを資料として」『平成9年度国語学会春季大会発表要旨集』, pp.70-77, 国語学会.
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版.